

書評

〔評者〕

渡邊祐司

倉敷中央病院・放射線科



CT・MRI 実践の達人

聖路加国際病院放射線科レジデント 編

A5 頁224 2012年

定価 3,780 円(本体 3,600 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01475-5]医学書院刊

この書は、これまでのCT, MRIの解説書とは異なる全く新しいタイプの実践書である。最大の特徴は、主眼を“目的疾患ごとに最適な画像所見を引き出すための検査プロトコール”を組み立てることに置いていることである。放射線科医はもちろん検査をオーダーする他科の医師、検査オーダーを受ける診療放射線技師にとっても重宝する1冊である。

MRやCTの機器の進歩に伴い検査内容が多彩となり、どのような検査プロトコールにすればもっとも効率よく診断に適する画像を提供できるのか、困惑することがしばしばである。臨床現場では追加スキャンなどについて検査依頼医師や担当放射線技師は放射線科専門医のアドバイスを待っている時間的余裕もない。また、放射線科専門医が不足している昨今、検査時にそもそも放射線科医が不在の状況も多々あると思われる。そのような状況を打開してくれるのがこの書である。あらかじめ、症状や疾患ごとに理想的な検査プロトコールを決めておけば、診断に最適な画像情報を迷うことなく手にすることができる。

本書は、“はじめに”“CT編”“MRI編”の3部から構成されている。“はじめに”は基礎編で、初学者にもCT, MRIの原理が学べるように、わかりやすく解説している。MRI検査プロトコールの組み立て方を習得し、造影剤の使い方と腎機能障害における基本的考え方を学ぶことができる。“CT編”“MRI編”では検査部位ご

とに「検査プロトコール」「目的・特徴」「基本画像」「追加作成画像」に分けて説明されている。CT編では、頭頸部、胸部、腹部・骨盤、血管系、骨格系に分類し、MRI編では、脳、眼窩、頸部、脊椎・脊髄、胸部、上腹部、骨盤部、骨・関節に分類し、そのなかで症状や疾患別に最適な検査プロトコールを提案している。「目的・特徴」の項目では検査を実施するうえでの基本となる考え方が書かれている。造影検査が必要な場合と不要な場合と、撮像時間が明確に示されている。さらに「追加検査」の項目では、通常のプロトコールでは不十分なときに追加すべきスキャンをどうすればよいかが書かれている。まさに“CT・MRI実践の達人”になれる書である。またCT, MRI、場合によってはUSの比較がされているので、特定の症状や疾患で適切に検査法を選択するのに役立つ。

この書は最新の検査知識を集約しているうえに、このような特徴をそなえているので、検査室に1冊常備しておくとういと思われる。そしてレジデントだけでなく中堅、ベテランの医師でさえ一読するとよい1冊である。また検査オーダーを受ける放射線技師にとっても、臨床に必要な画像を得るためのプロトコール選択についての考え方を学ぶために大いに役立つと思われる。この本を読んで明日からあなたも検査の“実践の達人”になりましょう！